
バカとI S とガンナーと召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとISとガンナーと召喚獣

【Nコード】

N5267Y

【作者名】

直井刹那

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

オリ主が幼馴染の明久や

Fクラスメンバーの秀吉、雄二、ムツリー二等や

Aクラスから翔子や優子、愛子たちのメンバーと

ISから一夏や箒、シャルロット、鈴、セシリア、ラウラたち

IS操縦者も加入して楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだ、

という人はバックしてください。

そしてあまり姫路と島田の出番が少ないかもしれません。
皆さんの感想お待ちしていますm(_____)m

前置き

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。

オリ主が幼馴染の明久やFクラスメンバーの秀吉、雄二、ムツリー
二等や

Aクラスから翔子や優子、愛子たちのメンバーと

ISから一夏や篤、シャルロット、鈴、セシリア、ラウラたちIS
操縦者も加入して

楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

明久×瑞樹・明久×美波じゃなきゃダメだ、という人はバックして
ください。

そしてあまり姫路と島田の出番が少ないかもしれません。

皆さんの感想お待ちしておりますm(_____)m

設定

設定・変更点

- ・文月学園は世界に1校しかない科学とオカルトが融合した学園。
- ・オリ主が明久たちバカテスメンバーやISメンバーと学園生活を面白おかしく過ごしていきます
- ・明久はもちろんの事、観察処分者です。
- ・ISのメンバーは召喚獣がISの装備になっています。
- ・明久は姫路に恋心を抱いていない。
- ・明久は健康的な食生活をしている。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

〕 召喚戦争のルール 〕

1、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し召喚が可能となる。

なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

2 年学年主任：高橋洋子

西村 宗一 に関しては全教科、総合科目での勝負の立会いを可能とする

2、召喚獣は各人1体のみ所有。

この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。

総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、

その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、

テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

5、相手が召喚獣を喚び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は

戦闘放棄とみだし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は、担当教師の半径10m程度（個人差あり）。

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。

召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。

この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

9、クラス間同士での同盟など自由で戦争も有。

例) 元がFクラスV S Bクラスであつて

途中でBクラスがCクラスに同盟組んだ場合、

FクラスV S Bクラス& Cクラスが可能となる。

ただし、この場合もしBクラスの代表が討たれた場合Cクラスも負けとなる。

よつてFクラスはB又はCクラス好きなほうの設備を手に入れることができ、

B・CクラスはFクラス設備となる。

） 試験科目について ）

【 科目 】

・現代国語	・数学	・保健体育
・古典	・化学	・英語
・世界史	・物理	・現代社会
・日本史		

以上、計10科目に設定しています。

総合科目は上記の全ての点数の和とし、

召喚獣の腕輪は各教科400点以上の時に装備される。

総合科目では4000点の時装備される。

各クラスの総合科目の点数

・ Fクラス	1 0 0 0 点以下
・ Eクラス	1 0 0 0 ～ 1 3 0 0 点
・ Dクラス	1 3 0 0 ～ 1 6 0 0 点
・ Cクラス	1 6 0 0 ～ 1 9 0 0 点
・ Bクラス	1 9 0 0 ～ 2 2 0 0 点
・ Aクラス	2 2 0 0 点以上

こんな感じに考えてます。

ただし、A～Eクラスは定員50名となっているので
Eクラス並の点数でもFクラスになる可能性がある

設定（後書き）

調子に乗って投稿しました。

今回は長続きできるよう頑張りたいと思います。応援よろしく願います。

オリキャラ紹介

かざまたくと
風間拓斗

- ・身長：178cm
 - ・誕生日：7月7日
 - ・一人称：俺
 - ・あだ名：タクト、拓斗
 - ・趣味：ゲームや漫画（軽いオタク）↑明久の影響
 - ・好きなこと（もの）：友達（特に明久）、食べ物（特にお菓子）、明久の料理
 - ・嫌いなこと（もの）：友達を傷つけるヤツ、姫路の料理トラウマ
 - ・特技：射撃
- 明久をバカにするヤツ

特筆事項

- ・一応本作の主人公。
- ・見た目はスタードライバーのツナシタクトで髪の色が黒である。

- ・明久や姫路とは小学校からの付き合い。
- ・小学生の頃はいじめられっこだったが明久に助けれたことがある。

それ以降明久と仲良くなった。その時今度は明久を助けたいと思い体を鍛えている。

また、姫路の殺人料理の1番最初の被害者。

たまたま小学校の調理実習の時同じ班だったので食べた事がある。

- ・家族構成は父親・母親・祖父・兄がいる。

父は探検家で現在は母と共に海外にて冒険中。

また祖父は世界で知らないものはいないといわれる

大企業の社長である。なのでよくお小遣いやお菓子が届けられる。

兄は祖父のところで働いている。次期社長といわれている。

- ・家は明久の家（部屋）の隣の家。

本人が料理できないので明久と一緒に食事をしている。

- ・体を鍛えたので雄二以上武力をもつ。

また銃の扱いがピカーで常に改造エアガンを2丁仕込んでいる。

改造エアガンの威力は普通のエアガンと比べると威力が全然違う。

成績も翔子には少し劣るが学年次席の成績をもち文武両道である。

- ・時々まじめだが時々フリーダムな男

- ・鞆の中にはお菓子がたくさん入っている。休み時間などによく食べている。

- ・空腹状態が長く続きと暴走する事がある。

- ・文月学園では1年の時は明久たちとは違うクラスで翔子や優子と同じクラスだった。

- ・観察処分者である。

振り分け試験の時明久が倒れた姫路をつれて退出した時に、教師の1人が明久の事をバカにしたので仕込んでいたエアガンで

ンで

その教師をブツ飛ばしたから。

他にも理由があり、時々早退して

アニフェスやケーキバイキングなどに行ったことがあるため。

< 召喚獣 >

- 防具：ガンダム00のケルディムガンダムGNHW/R。

- 武器　・スナイパーライフル

銃身を折りたたむことで、
取り回しと連射性能に優れた3連バルカンモード
に変形する。

される。

- ・ビームピストル

左右の背部に1挺ずつ懸架されたビームピストル。
接近戦用にコーティングを施した銃剣が設置され

ている。

とができる

できる。

- ・ミサイルポッド

腰部フロントアーマーに内蔵されているミサイル
ポッド。

2連装のポッドを左右各2基ずつの4基、
合計8発のミサイルを内蔵している。

- ・シールドビット

遠隔操作が可能なシールド。

シールドを自在に分散、密集させることで、
多方向からの攻撃に対応できる。

左肩に2基、両膝に2基、背中に7基の計11基
が装備されている。

各ビットにビーム砲が内蔵されており、

4基を格子状に配置した「アサルトモード」では、
より強力なビームを発射することができる。

- ・ライフフルビット

シールドビットよりも大型の遠隔誘導兵器。
右肩に2基、太陽炉に4基の計6基を装備する。

離を持ち、

1基でスナイパーライフルと同等の威力と射的距

右肩の2基は固定砲塔としても機能する。

シールドビットと同様に、盾としても使用できる。

召喚時に任意で装着可能。

●腕輪の能力

『トランザム』

・召喚獣の能力が30分間大幅にUPする。

30分経過すると効果が自動的にきれ、

能力が10分間元の1/2落ちる（点数も）

・使用時は召喚獣の体や装備の色が赤く染ま

る。

ブローグ　＼振り分け試験当日＼

『試験召喚システム』――

科学とオカルトの偶然により完成されたそれは
テストの点数に応じた『召喚獣』を呼び出し戦うことのできる
最先端システムである。これは世界でもこの学園でしかまだ確認で
きていない。

その召喚獣を用いたクラス単位の戦争――

それが『試召戦争』――試験召喚戦争である。

試験によりクラスがAクラス、Fクラスにまで振り分けられる。
振り分け基準は勿論テストの点数である。

頭が良ければAクラス、そこからB、C、D、Eと下がっていき、
最も頭が悪ければFクラスとなる。

更にこのシステムが運営されている、
この『文月学園』では、テストの上限がなく、クラス毎に設備が変
わる。

Aクラスでは、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライ
ニングシートなどの

設備が整っており、全て学園側から支給される。

一方Fクラスはというと、机は卓袱台、椅子は座布団、チヨークす

ら用意されていなく、
蜘蛛の巣がはっついて、カビ臭い。

しかしそんな設備も『試験召喚戦争』により変えることができる。

下位のクラスは上位のクラスに勝てば施設を交換できる。
逆に負けた場合は施設が一段階悪くなる。

今日はそんな学園のクラス分けテストの日……
俺は試験を受けていた

教師「それではクラス振り分け試験始め！！」

教師の合図で全員がテストをめくる。

明久「（難しいと噂の試験だけどこの程度なら10問に3問程度なら解ける！！）」

ここに、試験に取り組む少年がいた。彼は吉井明久という。
明久は俺と小学校からの親友である。

『ガタンッ！！』

突然明久の近くで誰かが倒れた。

明久「ひ、姫路さん！？」

明久は席を立ち、姫路に駆け寄る。

教師A「吉井！！試験中だぞ、席につけッ！！」

明久「でも、姫路さんが…」

教師A「姫路、…体調が悪いなら保健室に行くか？

ただし試験中の退室は『無得点』扱いとなるがそれでいいかね？」

明久「ちよっ！！具合が悪くて退席するだけでそれは酷いじゃないですかっ！！」

姫路「……た、退席します…」

教師A「では姫路、お前は無得点だ」

姫路「……はい…」

明久の必死の抗議も聞き入れてもらえず、結局姫路は無得点扱いに。ちよつと理不尽すぎやしないか？こんな事で無得点なんて。

姫路「失礼………しま………あ……！」

明久「っ！姫路さんっ！」

フラフラしながら教室を出ようとする姫路さんがバランスを崩し、咄嗟に明久が支える。

明久「姫路さん掴まって。僕が保健室まで付き添うから」

姫路「よ…吉井くん…、でも…」

教師A「吉井、何をしている！早く席に戻れ！！」

明久「こんな状態の姫路さんを放っておく事なんて出来ません！」

教師A「貴様も無得点扱いにするぞ！？」

明久「ご自由に。姫路さん、行こう」

教師A「待て、吉井！！」

『ピシヤッ！』

先生の言葉を気にも止めずに、明久は姫路さんを連れて教室から出ていった。

……そうだな、明久はそんなヤツだからな。

自分が大事だけどそれ以上に周りの人を大事にする人…。

そんな明久だから、俺はアイツの親友でいられるんだ……。

（さて、そしたら俺はどうするかなあ…）

正直クラスなんてどこでもいいしな。

明久と同じクラスであればどこでもいいし。

いつそ名前無記入で出すかなあ…。

——と、そんな事を考えていたら…。

教師A「チツ、クスが……」

……あ？

気のせいだろうか……。この教師、今小声で許しがたい言葉をほざいた様な……。

教師A「まったく、バカの考える事はよくわからん」

……。

ガタッ！

教師A「ん？何だ風間、お前も無得点にされたいのか!？」

何か言ってるみたいだけど全然聞こえない。

今、俺にはテストよりも大事な事しないといけないことがある。

何かって？それは――。

『ツカツカ』

教師A「な…、何だ!？」

「（ニヒン）」

カチャ

『バンッ！！』

教師A「ぐぼおっ！？」

俺は懷から隠し持っていた改造エアガンを取り出し教師の腹をゼロ距離で撃った。

その後教師の顔を1発殴り、

拓斗「すいません。気分悪いんで早退します」

悶絶してる教師と啞然としてる他の生徒に一瞥もくねず、俺は拳を振りながら教室から出ていった。

プロローグ 始業式

俺達が文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

別に花を愛でるほど雅な人間じゃないけど、その眺めには一瞬目を奪われる

はずだった――

明久「遅刻だぁーっ!!」

――それは、俺達は初日の始業式から、いきなり遅刻しそうになってるからだ。

何故こんな事になったかというと

拓斗「そろそろ時間だから明久を起こしてに行くか」

俺、風間拓斗は吉井家とは昔から仲が良く食事は明久に作ってもらっている。

ちなみに家は隣。

今日は文月学園2度目の始業式の日である。

拓斗「明久朝だぞ！起きろぉーっ!!!!」

明久がいつものように起こされていたのが始まりだ。

始業式当日の今日の朝方までゲームをしていたらしく全然起きなく、
やっと起きたと思ったたら何故か昔の姉の制服を着ており、
また着替えるという作業をしていて気づいたら時間がヤバいという
ことだ。

拓斗「これというのも、お前が寝坊して間違っつて姉の制服なんか着
るからだぞー!!」

明久「ご、ごめん。ゲームのキリがなくなくてさ」

拓斗「昨日あれほど言ったじゃないか！

せめて始業式の日ぐらいは遅刻しなくなかったのに」

というわけで俺達は学園へと続く坂道を登っている。

坂道を登りきると

西村「吉井、風間遅刻だぞ」

……ドスのきいた声に呼び止められた。

明久「あ、鉄じー！ー西村先生、おはようございます」

拓斗「鉄村先生おはようございます!」

鉄人「吉井兄、今鉄人って言わなかったか？

それと風間は鉄人と西村を混ぜただろ」

明・拓「ははっ、気のせいですよ」

鉄人「ん、そうか？……まあいい。」

あっいいんだ。

鉄人「それよりお前ら普通に『おはようございます』じゃないだろ」

明・拓「今日も肌が黒いですね」

鉄人「……お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

明・拓「そつちでしたか。すみません」

鉄人「まったくお前らは……まあいい。ほら、受け取れ」

鉄人が俺達に封筒を差し出してくる。

宛て名欄には大きく僕らの名前が書いてあった。

拓斗「あ、クラス分けの紙ですか。どーもです」

明久「僕、思っただんですけど、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を

発表しているんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいと

思っんですけど」

西村「普通はそうするだけだな。まあ、ウチは世界的にも注目されている

最先端システムを導入した試験校だからな。
この変わったやり方もその一環ってワケだ」

明久「ふーん。そういうもんですかね」

西村「今回の事は他の先生方から聞かせてもらった。吉井」

明久「はい」

西村「俺個人の考えとしては、お前の行動を褒めてやりたい。
出来ればもう一度チャンスを与えてやりたい。だがルールは
ルールだ」

明久「はい。大丈夫です、後悔してませんから」

西村「そうか…、ならいい」

明久は微塵も後悔していない。真っ直ぐな視線で鉄村先生にそう伝えた。

さすが明久だな。

西村「だが、問題はお前だ風間！」

拓斗「ええっ！？俺！？」

突然鉄村先生に呼ばれて我に帰る。俺が何をしたと？

西村「いくら大事な幼馴染みがバカにされたからといって、
教師を殴り飛ばすとは何事か！！」

明久「ええっ！？タクトそんな事したの！？」

拓斗「何言ってるんですか！寧ろ2発で済ませた事を褒めてもらいたい位です！」

本当だったら病院送りにしてやりたい位ですよ！？」

西村「その2発で殴られた先生は病院送りになったのだが？」

拓斗「あれおかしいな？手加減した気がするのに」

まああの時、頭に血が上ってて手加減しなかったからな……。
……… スッキリした事は黙っておこう……。

明久「八雲だめだよ。怪我なんかさせちゃ……」

西村「吉井の言う通りだ。解ったら少しは反省して——」

明久「ばれない様にしないと」

八雲「そうだな。今度からはそうする」

西村「違う！とにかくっ！風間には今後、嚴重な監視が必要だと
先日の職員会議で決定した」

そう言いながら鉄先生は懷からさっきとは別の封筒を取り出し、
俺に差し出してきた。

西村「受け取れ、これがお前に対する罰だ」

拓斗「何ですかコレ？」

西村「見れば分かる」

封筒を上から破って、中の紙を開いた。

明久「ちょ…、タクト…!？」

後ろから覗き込んでる明久が動揺してるみたいだけど、俺は意外とすんなり受け入れる事が出来た。

まあ予想はしてたし、当然といえば当然だしな。

風間拓斗

上記の者を文月学園指定《観察処分者》として認定する――。

こうしてボクたちの二年目の高校生活が、幕を開けた。

ブログ ～自己紹介～

明久「……なんだろう、このばかデカイ教室は、
ここ本当に教室？高級ホテルのロビーにしか見えないんだけど」

拓斗「個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他もろもろ豪華な品々…

本当に勉強する環境か？ここは」

明久「…教室の設備に色々と突っ込みたいけど、これ以上の遅刻はマズイし、

僕達も教室に行こうよ！」

拓斗「ああ、そうだな」

そうして僕らはFクラスに向かう。

明久の言う通り、その教室には 2 - F と書かれたプレートが掛かっていた。

明久「じゃ、僕から入るね」

拓斗「了解」

ガラッ

明久「ごめんなさい少し遅れました」

雄二「早く座れ！！このウジ虫や！？」

拓斗「よっ雄二！今、何て言った？撃つぞ」

僕は雄二に向けてエアガンを構える。

雄二「な！？拓斗か！い、今は言葉のアヤだ。

ってなんでお前がFクラスに？お前ならAクラス入り確定だろうが」

拓斗「まあ色々あってな。

だけどAクラスより明久やお前らと一緒にいたほうがいいしな」

雄二「お前らしいな」

と、その時。

福原「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福原「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

拓斗「りょーかい」

明久「はい、わかりました」

雄二「うーっす」

俺たちは人はそれぞれ好きな席に向かう。

ちなみに俺は明久の隣で雄二の後ろの席だった。

福原「えー、担任の福村慎です、よろしくお願いします。」

教壇に立った福村先生は自己紹介をし、

黒板に名前を書こうとしたがその手を止めた。理由はチョークがないからである。

福原「皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますか？」

不備があつたら申し出て下さい。」

明久「これで不備がないって言う人に会ってみたいよ」

拓斗「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

F「せんせー、俺の座布団綿がほとんど入っていません」

福原「我慢してください」

F「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

福原「木工ボンドが支給されますので自分で直してください」

F「センス、窓が割れてて風が寒いんですけど」

福原「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

それに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

スクツ

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。けど秀吉は男なんだが……次はその前の少年が立った。

康太「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。

彼はムツツリー二というあだ名を持っているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。

秀吉と康太とは去年からの付き合いだ。

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。」

あ、でも、英語も苦手です。趣味は――」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女―島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です。」

島田が明久に向かって手を振っている。

おい島田、明久が震えているぞ。

大丈夫だ明久。もし手を出そうものなら俺が処理する。

次々に自己紹介がすんでいき次は明久の番になった。

明久「ーコホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね♪」

次の瞬間、

F「「「ダアアーリーーン!!。」」」

野太い男の大合唱。

明久「……………失礼、忘れてください。

とにかくよろしく願いします」

拓斗「……………明久」

明久「ごめん。まさかあんな反応するとは思わなかったんだよ」

おっ、次は僕の番だな。

拓斗「風間拓斗だ。これからよろしく頼む。」

特技は銃を扱う事で、狙い撃ちや早撃ちが得意だ。趣味はゲームや漫画。

そしてお菓子が大好きだ。だから何かくれると嬉しい。あっそうだ。先に言うておくが明久に手を出したら――」

ガシヤ

俺は隠し持っていたエアガンを取り出し構えると

拓斗「——生きて返さないから、そこのとこよく覚えておいてくれ」

[illegible]

Fクラスの皆はエアガンを見て大人しくなった。

再び自己紹介が続いていく。

「夏一織斑一夏です。よろしくお願いします」

へーあんなヤツも俺達のクラスなんだ。

どんな自己紹介するんだ。

一夏「以上です」

ガクツ

それだけか！

少し期待していたのに・・・

周りを見てみるとあまり興味がないようだった。俺だけか？

第「篠ノ之箒だ。よろしく頼む」

また名前だけの自己紹介か。

まあ皆それだけみたいだからいいのか？

ブローグ　これがFクラス

自己紹介が進んで言っていると

？「あの、遅れて、すいま、せん。」

F「「え？。」」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

福原「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、

姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

途中から尻すばみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F「はいつ、質問です！」

姫路「あ、はいつ。なんですか？」

F「何でここにいますか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員がそう思っていた事だった。彼女は容姿も人目を引く程で、1年次のテストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

姫路の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見て、俺は一言。

拓斗「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします!」

姫路は逃げるように、雄二の近くの空いてる席に着いた。
彼女は席に着くや否や、安堵の息について卓袱台に突っ伏してしま
う。

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か？」

姫路「えーっと…、あなたは…」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しく願いします。」

深々頭を下げる姫路。

こーゆーところからでも彼女の育ちの良さが伺えるというものだ。

雄二「ところで姫路。体調の方はもう良いのか？」

明久「あ、それはぼくも気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君!？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

明久「え？」

姫路「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、

俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言った様な表情に。

明久「え？ それって――」

姫路「そつ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

雄二「確か、久保……利光だったか？」

拓斗「やっぱりか」

久保利光 性別（♂ / オス） 現在Aクラス所属

雄二「おい明久、さめざめと泣くな」

拓斗「よりもよって男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通はこうなると思うぞ？」

雄二「……まあ、確かにな」

パンパン！

福原「はいはい。その人たち、静かに」

バキッ！ パラパラパラ……

福原「してください……ね？」

本人としては、軽くだいたいたつもりだろう。

だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

福原「えゝ。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしてみてくださいね」

拓斗「どんだけ酷い設備なんだよ！？」

福原「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何回目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

雄二「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

拓斗「何だ、明久が気になるのか？」

姫路「え？　いつ、いえ、そういうわけでは……」

拓斗「ふーん、じゃあそういうことにしとくよ」

俺は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくつと立ちあがる。
秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじゃ、またお主ら3人で悪たくみかの？」

拓斗「さあな、どうだろうな。でも面白い事になりそうだな」

秀吉「やれやれ……まあお主らしいのう」

拓斗「だけど嫌いじゃないだろ」

秀吉「飽きはしないのう」

互いに笑いあって、俺は1人気取られない様廊下へ。
そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

雄二「つまり、姫路の為だろ？」

明久「そうだね、姫路さんには酷い環境だから、

改善してあげたいって気持ちはあるし心配なんだ」

雄二「優しい所は相変わらずだな」

拓斗「それが明久だろ。で、何面白そうな事話してるんだ？」

俺は立ち聞きをやめ、会話に加わる。

明久「拓斗！」

拓斗「俺にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、俺が乗らない訳ないだろ？」

それに明久の頼みなら断る理由がないからな」

明久はそれを聞いて感激し、雄二も不敵な笑みを浮かべた。

拓斗「で、雄二はなんで戦うんだ？」

雄二「世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな。

ってか拓斗も物好きだな…… っと、先生が来た。入るぞ」

拓斗「それじゃFクラス代表のお手並み、拝見と行こうか？」

雄二「ああ、任せておけ」

俺と明久は、雄二に向けてグッと親指を立てた。

雄二もそれに倣い、同様に親指を立てる。

拓斗「それより明久、試召戦争を提案したからにはお前も頑張れよ

？」

明久「もちろんだよ」

翔一「ちゃんと勉強位教えてやるよ」

明久「お願いするね拓斗」

雄二「改めて言うが、お前も物好きだな。明久に勉強を教えるなんて」

拓斗「まあコレくらいなんともないな。

それに明久には食事面で世話になってるからな」

雄二「そうか」

そして俺達が教室の中に戻った。

プロローグ　く雄二の宣言く

俺達は話し合いを終え教室に入ると
担任の先生が戻ってきて再び自己紹介が始まった。

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。
福原「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

雄二「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。
その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、
ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

そこで、あいつは少し……間を空けた。どうやら始まるか…

雄二「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、
みんなの視線も自然とそれを追っていた。

雄二「カビ臭く、すき間風が通る教室。古く、うす汚れて綿もス力
ス力な座布団。」

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台――」

そして再びみんなを見てから口を開いた。

雄二「そしてAクラスは冷暖房完備の上、

座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

雄二「不満はないか？」

F『『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

不満大爆発だ。

雄二「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている」

雄二は頷きながら同意する。

すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

F『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

F『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

F『そうだそうだ！』

引き継ぐように雄二は口を開いた。

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

雄二は一呼吸おくと

雄二「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

雄二は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふつと笑い

拓斗「面白くなりそうだ」

と呟いた。

キャラ 紹介1（前書き）

今作品ではこちらの勝手な都合で

キャラクターの自己PRを変えたり付け加えたりしています。
なるべくは原作に沿うようにしたいと思っています。

ひとまず

バカテスキャラから明久・雄二・秀吉・康太の4人を、
ISからは一夏、第の2名を紹介します。

キャラ 紹介 1

く バカテス く

吉井 明久 よしい あきひさ

- ・ 誕生日：3月6日 O型
- ・ 外見は本人曰く「365度」どこから見ても美少年。
身長は175cm
- ・ 学園創設以来初めての「バカ」の代名詞である「観察処分者」
- ・ 自己保身の為にはかなり悪知恵が働き不意打ちなどの卑怯な手段も躊躇わないが、良くも悪くもバカ正直で他人のために真剣に怒れるまっすぐな心根の持ち主
- ・ 文月学園には試験校の為学費が安いことから入学した。
- ・ 料理はそこらの家庭料理では相手にならないほどの腕前。
得意料理はパエリア
- ・ 得意科目は日本史、成績は拓斗のおかげでDクラス程度の学力を持つ。
- ・ 拓斗とは小学校からの親友
- ・ 拓斗のおかげでそこまでひもじい生活はしていない。

召喚獣

- ・ 服装：改造学ラン
- ・ 武器：ガンダム00のエクシアのGNソード
刀身を折り畳むことでライフルモードに変形する。
- ・ 腕輪：????

拓斗のおかげで少し点数が上がっていて日本史だけはAクラス並にあるので

武器が強くなっている。

坂本 さかもと
雄二 ゆうじ

・ Fクラス代表

・ 誕生日 8月7日 AB型

・ 187cmの長身と精悍な顔立ちを持つ不良少年

・ 幼少時代には「神童」の異名をとり、現在学年首席の地位を誇る翔子よりも

高い学力を持っていたが、中学生時代に勉強を全くせず体を鍛えていたため

現在はその面影は微塵にも感じられない。

中学生時代は喧嘩で鳴らしていたため今も尚「悪鬼羅刹」の名で

他校の不良達に恐れられている。

召喚獣

・ 服装：改造学ラン

・ 武器：ガントレット

・ 腕輪：????

Fクラスの代表なのでさすがにメリケンサックでは弱すぎるので

ガントレットに変えてみました。

木下 きのした
秀吉 ひでよし

・ 誕生日 10月25日 B型

・ 身長 160cm

・ 演劇部に所属

・ 特技は声帯模写で女声も男声も自由自在。

・ 一人称は「わし」で、語尾に「?じゃ」をつけるなど古風な

言い方が特徴

・ 可憐な外見に似合わずジャガイモの芽を食べても平気な

「鉄の胃袋」を持っている（自称）

召喚獣

- ・ 服装：袴
- ・ 武器：薙刀
- ・ 腕輪：????

土屋 康太
つちや こうた

- ・ 誕生日2月22日
- ・ 身長163cm、体重48kg、AB型
- ・ 「ムツツリーニ（寡黙なる性識者）」と呼ばれる。
- ・ ほぼ全ての台詞の頭に「……」が付くほど寡黙な性格
- ・ 原作の明久と同等のバカだが性に関する知識だけは豊富かつ貪欲で、

産物

- ・ 現代に蘇った忍者と称される「情報屋」で諜報（盗撮&am
- p・盗聴等）
- 探索・暗殺・ピッキング技術に優れ裏方のエキスパート
- ・ 得意科目は保健体育

召喚獣

- ・ 服装：忍装束
- ・ 武器：小太刀二刀流
- ・ 腕輪：加速

（ISS）

織斑 一夏
おりむら いちか

・誕生日：9月27日

・身長は172cm

・クラス：『F』

・物心つく前に両親に捨てられ、その後は姉の千冬と暮らしていた。

高校受験の際、千冬に養ってもらっていることを引け目に感じ、

学費が安い文月学園に入学した。

・常に外で働いていた千冬に代わって家事全般をこなしてきたため

そのスキルは高く、マッサージも得意。

・飄々とした性格ながらも自分の信念は貫く熱い一面を持つ。
また、女性に媚びるような真似はしない。

・幼い頃から千冬に守られてきたことから「誰かを守ること」に強い憧れを持つ。

・整った容姿に加え人の心の機微に鋭く、境界線の無い優しさと天然で女性をときめかせる言動や行動を見せる事から学園の内外を

問わず数多くの女子に好意を寄せられている。

しかし恋愛に対してだけは呆れるほどに鈍感なため、
学園生徒達からは「唐変木・オブ・唐変木ズ」と陰で呼ばれている。

・振り分け試験日に道端で困っている老人を助けて遅刻したためFクラスへ

・成績はCクラス程度。得意科目は現代国語。

召喚獣

・見た目は『白式』ゆきひらにがたを装着した召喚獣。

・武器 ・雪片式型

刀剣の形をした、近接戦闘用の主力武装。

●腕輪
『零落白夜』
れいらくびやくちや

・対象の点数を全てを消滅させる。
使用の際は雪片式型が変形し、エネルギーの刃を形成する。

相手の点数攻撃や腕輪による攻撃を無効化したり最大の攻撃能力。

自身の点数を消費して稼動するため、
使用するほど自身も危機に陥ってしまう諸刃の剣でもある。

篠ノ之 篇
しののへ ぴん

・誕生日：7月7日

・身長は160？

・クラス『F』

・長い黒髪でポニーテールの髪型をしている。

・年齢不相応に大きい胸を気にしている。

・長年の剣道で培った体からは長身の印象を受ける。

・実家は剣術道場でもある篠ノ之神社。

そのため幼い頃から剣道をたしなんでおり、

実力はかなりのもので中学3年生の時に剣道の全国大会で優勝したほど。

一夏とは剣術道場の同門で小学校では1年生の時からずっと同じ学級だった。

一夏と知り合った頃は馬が合わず、たびたび衝突していたが、
小学2年生の時、同級生の男子児童らのいじめから庇ってくれたことを

きっかけに名前呼び合う仲になり、その後は剣道を通じて打ち解けていった。

- ・成績はCクラス程度。得意科目は現代国語。

召喚獣

- 見た目は『紅椿』を装着した召喚獣。
あまつぎ からわれ
- 武器 ・ 雨月、空裂

刀剣の形をした主力武装。

雨月は刺突攻撃の際にレーザーを放出し、

空裂は斬撃そのものをエネルギー刃として放出する

ことが出来るため、

一対多における中距離戦闘にも適している。

- 腕輪

けんらんぶとつ
『絢爛舞踏』

- ・ 点数増幅能力となっている。

使用時には装甲から放出される黄金色の粒子によって

召喚獣の体が金色に輝き、少ない点数を増幅して

一気に召喚した時の状態の点数に回復したりできる。

他のISへの点数提供を機体接触するだけで即時実行

出来る。

ただし、これは操作者が友人だと思っているものにし

か発動しない。

また回数も7回までしか発動できない。

プロローグ 〈試験召喚戦争〉

雄二「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

F「そんなの勝てるわけがないだろ？」

F「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらなない」

雄二がそういうとFクラスから否定的な声があがる。
何か関係ないものもあつたが……

雄二「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まってるじゃん」

F「そう言われても何の根拠もないしなあ……」

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した

雄二「それを今から証明してやる！

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ」

康太「……………!!」

そういつと康太は素早く立ち上がり首を横に振った。

姫路「えっ」

姫路さんは顔を赤く染めスカートを押さえた。

雄二「土屋康太 こいつがあ有名な寡黙なる性職者だ」
ムッリーニ

そういつと康太は首を横に振った
ムッリーニ

F「馬鹿な・・・奴がそうだというのか？」

F「見る！まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

F「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」

雄二「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

姫路「え？私ですか？」

姫路はは学年トップ10に入っているほどの実力がある。

雄二「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだ！俺達には姫路さんがいる！」

F「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

雄二「それに木下秀吉だっている」

秀吉「ワシもか？」

F「演劇部のホープ！」

F「確かAクラスに木下優子っていう姉がいただろ」

雄二「そのほかにも島田もいる」

島田「えっウチ？」

火燐「わ、私もですか？」

雄二「島田は数学だけならBクラスにも匹敵するだけの实力がある」

F「そうなのか」

雄二「織斑一夏や篠ノ之箒もいる。

コイツラも成績はBクラス・Cクラス並だ」

一夏「え？俺を知っているのか」

雄二「ああ、一応クラス代表なんだな。2人のことは調べた。

それに織斑も篠ノ之の2人は剣道をしているからな。

ある程度の動きはいいはずだ」

一夏「まあ期待に答えられるよう頑張るぞ」

箒「まあ頑張るとしよう」

雄二「それに風間拓斗いる。皆も聞いたことがあるはずだ

『文月の最強最悪の死神』を。コイツがその死神だ!」

F「なんだと!？」

F「『死神』だと!？」

確かヤツに目をつけられた人間は無事ですまないという」

F「あの死神が同じクラスに!？」

いや、ただ俺は明久がバカにされたからボコボコにただけなんだ
がな

雄二「それが今は俺達の味方だ」

F「おお、そうだな」

F「怖いものなんて無いな」

雄二「それに知ってるヤツもいるかも知れないが拓斗は

1年の頃は学年次席の学力を誇っている」

F「マジでか!？」

雄二「当然俺も全力を尽くす」

F「坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

F「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

F「これはいけるんじゃないか!？」

F「よし!やってやろうじゃねーか!！」

今教室の士気が高まっていったが

雄二「それに吉井明久だっている」

というとシーンと教室内は静まりかえった。

F「誰だよその吉井明久って」

F「それ以前にそんな奴らこのクラスにいたか？」

明久「雄二!何でそこで僕のの名前をだした!?
せっかく上がった士気が台無しだよね!！」

明久が文句を言うと、雄二が睨み付けてきた。

雄二「そうか、知らないのなら教えてやる。

こいつの肩書きは『観察処分者』だ!！」

ブローグ　く観察処分者く

雄二「こいつの肩書きは『観察処分者』だ!!」

F「確か観察処分者って『馬鹿の代名詞』じゃなかったっけ？」

明久「ちっ違うよ!!ちよっとお茶目な16歳の愛称で・・・」

雄二「そっだ『馬鹿の代名詞』だ」

明久「肯定するなバカ雄二!!」

拓斗「あ、そっだ雄二。俺は今日付けで観察処分者になったからヨロ!!」

雄二「なに!?!タクトもか？」

拓斗「ああ、試験の時に軽く教師を殴ったら病院送りになってな。今日、鉄人から言われた」

雄二「お前は試験日に何をやっているんだ・・・・・・・・まあい」

拓斗「テヘッ」

雄二「気持ち悪いからやめろ・・・・・・・・まあい」

第「それで、観察処分者とはどういうものなんだ？」

雄二「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。」

力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

姫路「それって凄いですね！試験召喚獣って見た目と違って力持ちらしいですし」

明久「あはは。そんな大したものじゃないよ。

確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど、その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。

皆と同じで教師の監視かでしか呼び出せないし僕にメリットもないしね」

F「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も苦しいって事だろ？」

F「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じゃん」

F「役立たずが1人いるってことだろ」

雄二「勘違いするな！確かに明久はバカだが

観察処分者の利点を有効に活用できるんだ」

一夏「利点？」

雄二「ああ。他のヤツらと違い明久は召喚する回数が多いせいとか、召喚獣の操作がおそらく学年トップを誇るだろう。

それに明久は日本史だけはAクラス並の成績を誇る。

つまり明久は俺達の最高の戦力になるという事だ！」

一夏「なるほど……それは凄いな」

雄二の説明に納得するFクラスメンバー

雄二「だから明久はまわりのヤツラから見たらただの役立たずに見えるが」

実は俺達の切り札にもなるわけだ!!」

F「それって凄いな」

拓斗「ゆ、雄二があ、明久のことをフォ、フォローしたと……」

秀吉「本当じゃのう。いつもなら率先して明久のこと蹴落とすといふのに……」

一夏「そこまで驚くことなのか？」

拓斗「あの雄二だぞ！明久の不幸が自分の幸せとまで言っているアイツが」

明久をフォローしたんだ！これは異常事態だ……」

第「そ、そこまで……」

雄二「と、とにかくだ！俺達の力の証明としてまずDクラスを制圧しようと思う。」

皆この境遇に大いに不満だろう？」

F「……当然だ!!」「」「」

雄二「なら全員筆を執れ！！出陣の準備だ！」

F「「「「「おおー！ー！ーッ！！」「」「」」

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだー！！」

F「「「「「うおおー！ー！ーッ！！」「」「」」

姫路「おッおー／／／」

姫路も恥ずかしげに掛け声をあげた。

雄二「まずは今日、何人かもう一度試験を受けてもらう」

明久「どういうこと？」

雄二「簡単な事だ。現時点で明久と拓斗、織斑と篠ノ之は今の点数が低いはずだからな。今から試験を受けて点数を回復してもらう。

それに俺もFクラス代表になるため少し点数をセーブしたからな」

拓斗「そういうことか」

雄二「ということで俺達5人が回復試験を受けるわけだが

皆は他のクラスに俺達が試召戦争を始めようとしていることを知られないために、自由にしておいてくれ。

今日は始業式だけだからな早めに帰っても良いだろう。

ただ姫路だけはすぐに帰ってくれ。

おまえの存在を他のクラスに知られたくないからな。
お前は俺達の秘密兵器だからな」

姫路「わかりました」

その後H Rも終わり解散となり、俺達5人は回復試験を受けた。

その後、俺達は一夏と箒と仲良くなり名前で呼び合うことになった。

そして俺たちの戦いの幕が開こうとしていた。

Dクラス戦　～開戦前～

翌日

雄二「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の死者になって貰う。
無事大役を果たせ！」

明久「イヤだ！それに下位勢力の宣戦布告の使者って、
大抵酷い目に遭うよね？しかも今、字が違わなかった？」

雄二「チツ。明久のクセに気づいたか」

拓斗「さすがに明久でもそれぐらいわかるさ。

でもな雄二。明久は大事な戦力だぞ。使者なんて任せるなよ」

雄二「ああ、そうだったな。ついいつものクセで」

明久「ちよつと！それということ」

結局宣戦布告の使者は須川に任せた。

そのしばらくの後、須川がボロボロの状態で教室に転がり込んだ。

Dクラスに掴みかかれ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は一言。

雄二「やはりそう来たか」

それはそうだろうな。

それで須川が騒いでいたが軽く流した。

雄二「さて、今からミーティング行っぞ?」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

一夏「俺たちもいいか?」

拓斗「もちろんだ」

そして、皆で屋上に。

雄二「で、須川がちゃんと開戦時間を伝えたらしいからな」

明久「だから先にお昼ご飯だね?」

雄二「今日も弁当か明久」

明久「うんそだよ。はい拓斗」

拓斗「いつも悪いな」

俺たちは明久から弁当を受け取る。

パクパクパクパク

明久「落ちついて食べてよ」

拓斗「おいしそうでつい」

姫路「あれ、そのお弁当って？」

拓斗「明久が作ってくれたんだ」

雄二「明久の料理は美味しいからな」

島田「え？吉井が弁当作ったの？」

明久「そうだよ」

一夏「凄いな明久は」

姫路「う、嘘です。吉井君が料理できるなんて信じられません」

島田「そうよ。本当は誰が作ったのよ！」

拓斗「いや、その弁当は本当に明久が作ったんだぞ」

雄二「明久の料理は上手いから。俺もまだ勉強しないとな」

秀吉「明久の料理は美味しいからの」

康太「・・・・・・・・・・また食べたい」

姫・島「信じられません（信じられない）」「」

第「そこまでの腕なのか？」

一夏「ちよつと気になるな」

拓斗「なら少しだけわけてやるよ。少しだけだからな」

俺はそういうと卵焼きを1切れずつ一夏と篝に分けてあげた。

一夏「こ、これは美味しいな」

篝「うん、これは店に出せる味だぞ」

明久「そ、そうかな／＼／＼」

拓斗「だろ。美味しいだろ」

一夏「そういえばなんで明久はタクトに弁当作ってきてるんだ？」

明久「それはね勉強とかでよくタクトに世話になってるから、
そのお返しかな」

雄二「さて話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

秀吉「雄二よ。1つ気になったんじゃが」

どうしてAでもEでもなくDクラスなんじゃ？」

雄二「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。

明久見てみる。ここにいるメンバーを」

雄二が明久に集まったメンバーを見ると言い、

明久は全員の顔を見回し言うつと、

明久「えーと、美少女が3人、バカが2人にムツツリが1人と
親友が1人、ノーマルが1人いるね」

雄二「誰が美少女だと!？」

明久「どうして、雄二が美少女に反応するの!？」

康太「……………（ポッ）」

一夏「俺はなんだ？ やっぱバカの種類か？」

明久「ムツツリーニ一夏まで!？ どうしよう!？
僕だけじゃツツコミ切れないよ!？」

美少女に雄二と康太が反応して明久は声を上げる。

秀吉「まあまあ皆落ち着くのじゃ」

拓斗「そうだぞ。一度落ち着け」

俺と秀吉で明久たちを落ち着かせる。

明久曰く

美少女↓姫路・秀吉・箒

バカ↓雄二・島田

ムツツリ↓康太

親友↓拓斗

ノーマル↓一夏

雄二「ま、要するにだ」

コホンと咳払いして雄二が説明を再開する。

雄二「拓斗や姫路に問題のない今、正面からやりあっても

Eクラスには余裕で勝てる。Aクラスが目標である以上、

Eクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

明久「？ それならDクラスとは正面からぶつかるて厳しいの？」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明久「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？

それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

姫路「あ、あの〜」

雄二「ん？ どうした姫路」

姫路「えっと、その、さっき言いかけたって……吉井君と坂本君は、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

雄二「ああ、それか。それはついさっき明久が——」

明久「それはそうと！さっきの話、

Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる

……いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

島田「良いわね。面白そうじゃない！」

拓斗「暴れてやるぜ」

一夏「頑張るぜ」

篤「まあ頑張るとしよう」

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「……………（グッ）」

姫路「が、頑張りますっ」

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた。

Dクラス戦　～開幕～

雄二「皆、これからはDクラスと戦争を行う。

昨日言ったように俺達には強力な仲間がいる」

F「そうだ！俺たちにはあの『死神』がいるんだ」

F「それに姫路さんもいる」

F「篝さん俺とつきあってくれ」

F「姫路さん俺と結婚しよう」

今また何か幻聴が聞こえた気が……

雄二「そこで戦争を効率的に行うため部隊を作った」

明久「部隊？」

雄二「ああ、前線部隊、中堅部隊、遊撃部隊、
情報部隊、近衛部隊の5つの部隊を作ろうと思っている」

拓斗「で雄二、もう割り当ても考えてるんだろ」

雄二「ああ、今それを張り出す」

そして雄二は紙に書かれた部隊表を黒板へと貼りつけた。

< 前線部隊 >

部隊長 織斑一夏 補佐 篠ノ之箒
以下 10名 計12名

< 中堅部隊 >
部隊長 吉井明久 補佐 木下秀吉
以下 10名 計12名

< 遊撃部隊 >
部隊長 風間拓斗 補佐 なし
以下 11名 計12名

< 情報部隊 >
部隊長 土屋康太 補佐 なし
以下 7名 計8名

< 近衛部隊 >
部隊長 坂本雄二 補佐 姫路瑞希
(代表と兼任)
以下 15名 計17名

とかかれてあった。

俺たちFクラスは他のクラスより11名ほど多い61名いる。

理由は成績上位からクラスを分けているので
クラス毎に席の数が決まっている。

各クラス毎に50名なのでFクラスに残った者が送られるからである

雄二「という風になっている。俺からも指示を出すが

拓斗からも指示を出すようにしているから拓斗の指示にも従
うように」

拓斗「なあ雄二。それ俺の負担でかくないか？」

雄二「気のせいだ」

拓斗「絶対気のせいじゃない気がするが……」

雄二「で、作戦だが、まずは一夏率いる前線部隊がDクラスと戦う。その後方に明久率いる中堅部隊が状況を見てから援護しろ。情報部隊はムツツリーニたちで情報を集めてきてもらう。拓斗率いる遊撃部隊は、中堅部隊がピンチな時か、攻勢のときに出てくれ。

拓斗の判断に任せる。 残りはクラスで待機だ」

拓斗「了解」

雄二「では皆頑張って欲しい！」

開戦時間になり、
Fクラス対Dクラスの試召戦争の火蓋は切って落とされた。

く廊下く

一夏「はあああああああああああ！！！」

一夏が叫び、突撃する。

第「皆突っ込むんだ！」

F「うおおおおお!!!」

一夏が敵の先手とぶつかる。

Fクラス	織斑一夏	V S	Dクラス男1
化学	153点		135点

一夏は武器である雪片式型を上手く使い敵を倒す。

一夏は明久と比べると召喚獣の操作は上手くないが普通の生徒と比べると上手いほうだ。

それに点数差もあるせいか一瞬で倒す事ができた。

一夏「一番手柄、Fクラス、織村一夏がもらったぞ!!!」

F「俺達も続けえ!!!」

D「なんでFクラスにあんな点数のヤツがいるんだ!？」

敵がひるんだ所にFクラスの面々が突っ込んでいく。

D「クソっ! Fクラス相手にやられてたまるか」

D「塚本どうするんだ?」

塚本「焦るな。俺達のほうが点数も数も上だ!

困んでつぶすんだ!!!」

今、前線部隊は12名それに対しDクラスは30名近くいる。

12対30の戦いが始まっていた。

.....

F「うわぁ駄目だ！やられる！」

戦闘開始後やはり数と点数差でFクラスが押されてくる。

F「ここまでなのか」

F「やられる！」

箒「大丈夫か？皆、あきらめるな！最後まで戦うんだ！」

仲間がやられる直前、箒が割って入って助け出す。

一夏「箒の言うとおりだ！」

そして一夏が敵を切り裂いた。

F「姐さんありがとうございます。」

俺最後まで頑張ります」

F「俺達も姐さんに続くんだ！」

F「おおお!!!」

篤が仲間を助けた事で指揮が上がった。

篤「あ、姐さん……………」

一夏「良かったじゃないか篤。あだ名がついて」

篤「う、うるさい! 私達もいくぞ一夏!」

一夏「ああ、分かってる」

Dクラス戦　　～暴走少女登場！～

～明久Side～

島田「吉井！渡り廊下で織村達が戦闘状態になったわよ！」

僕の役目は秀吉や島田さんや他に数人を率いる中堅部隊の隊長だ。

明久「分かった！中堅部隊全員行くよ！」

《了解ッ！！》

そして僕は秀吉や島田さんを含む12人を率いて戦場へと向かって行った。

～明久Side　End～

一夏「くそっ！次から次へとキリがない！！」

Dクラスの生徒は完全にFクラスを油断しきっていた。

自分達よりも2ランク下、

しかも最下位のFクラス相手だから大したことないと思っていた。

が、すでに30人程が展開していたDクラスの前衛部隊は、既に半分の15人になっていた。

といってもFクラスのメンバーは

一夏と箒を入れて5人しか残っていなかった。

しかし一夏と箒の2人によって10名程倒されているのだが

箒「さすがにこのままではまずいな」

前線で味方を助けるため奮闘している箒だったが、さすがに点数が減ってきていた。

D「これで終わりだ！」

箒「し、しまった!？」

一夏「やらせるか！」

【化学】

F組・織斑一夏 69点

VS

D組・モブ 99点

D「しまっ !？」

振り向いた時、相手の召喚獣は一夏の一撃をくらい、消滅した。

箒「すまない一夏」

一夏「気にするな。箒は俺の後ろに下がって援護頼む」

箒「了解した」

鉄人「さあ戦死者は補習室に移動しろ!!」

そこへ現れたのは鉄人。

彼は逃げようとするDモブを捕まえ補習室まで担いで行った。

一夏（何とか勝てたが正直もう召喚獣はヘロヘロだな）

明久「一夏、箒さん！大丈夫!？」

Dクラス前線部隊を相手に疲弊しているところに明久達の中堅部隊が合流してくれた。

一夏「明久！来てくれたんだな！」

明久「うん！もう大丈夫だよ。それより状況は!？」

一夏「もう俺達しか残っていない。

それに点数もだが召喚獣も疲弊しきてる」

箒「すまない。敵の前線部隊の半分は倒したのだが……」

明久「わかった。これより中堅部隊が援護するよ！

だから前線部隊は下がって点数を回復してきて
さあ皆、僕に続けえ!!」

F『了解っ!!』

とりあえず指示を出し終わったあと、僕達は戦線へと向かった。

そこで僕たちは数人倒すと

美春「ようやく見つけました!お姉さま!」

島田「げっ! 美春」

明久「何?島田さん。知り合い」

清水「……お姉さまに捨てられて幾数日、美春は、

美春はこの瞬間を待ち続けていました!」

島田「もう!いい加減うちのことは諦めなさい!」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

清水「イヤです! お姉さまは、いつまでも……いつまでも、

美春のお姉さまなんです!」

繰り出された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

島田「来ないで！　ウチは普通に男が好きなの！」

清水「嘘です！　お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

どう見ても島田さんは嫌がっているはずなのだが、
清水さんにはそう見えならしい。

島田「て、やあ」

清水「負けません！」

何回かの打ち合いがあったが、
その全てで美波の召喚獣は打ち負ける。

明久「島田さん！点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメだ
！」

島田「そんな、こと、言われても、細かい、
動作は、できない、のよ、きゃっ！？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

清水「ここまでですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。
2人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。
当然、清水さんが94で島田さんが53だ。

清水「さ、お姉さま、勝負はつきました」

島田「ほ、補習室は嫌あつ！」

清水「補習室？……フフツ。

そんな無粋な場所へお姉さまを送り込んだりしませんわ。
さあ、参りましょう」

そう言うのと、清水さんは島田さんの手を取った。

島田「な、なにを……」

清水「この時間ならベッドも空いてますわ」

島田「い、いやよ。よ、吉井。助けて」

……仕方ないな。ここで戦力が減るのもイヤだし

清水「邪魔者は殺します！」

明久「はっ！」

僕は清水さんの攻撃を軽くかわし木刀をのどに突き刺した

清水「そ、そんな……」

召喚獣を一撃で倒された清水さんは、呆然と立ち尽くした。

島田「補習の西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします
！」

鉄人「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに

来い」

清水「お、お姉さま！美春は諦めませんから！

このまま無事に卒業出来るなんて思わないでくださいね！」

最後に恐ろしい言葉を残して連れ去られていった。

明久「……秀吉は負傷した島田さんをつれて下がってもらって良いかな。

ここは僕達が受け持つから」

秀吉「了解じゃ」

先ほどの清水さんの攻撃により島田さんの点数はかなり下がったので秀吉を護衛に下がって貰った。

さて、ここから頑張らないとね。

Dクラス戦 〽暴走少女登場! 〽 (後書き)

Dクラス戦 明久率いる中堅部隊登場です。

皆さんの感想お待ちしています!

Dクラス戦　く兄貴く

しかし粘っている間にも仲間が数人やられていた。

しかも今聞いた情報ではDクラスが先生を呼んでいるらしい。

確か先生は数学の船越先生だ。

相手は一気に僕達を片付ける気だ。

このままじゃヤバイな

と明久が考えていると

『ピンポンパンポン』

《連絡致します》

F「校内放送？」

明久「あれ？何かどこかで聞いた事のある声…」

F「なあ、こいつ須川じゃねーか？」

F「ああ、須川だな」

これは雄二の策かな

《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

明久「どうやら何かの作戦みたいだね」

F「おそらく先生を別の場所に向かわせて
時間を稼ぐのが狙いじゃろう」

明久「しかも船越先生とはタイミングがいいね」

《吉井明久君が体育館裏で待っています。
なんでも生徒と教師の垣根を越えた、
男と女の大事な話があるそうです》

ちなみに船越先生は今年も婚期を逃し、
生徒に単位を使っておどし迫ったほどの人物だ。

D「Fクラスのヤツらはそうまでして勝ちたいのか」

D「俺達が勝てるのか？」

F「流石だよ隊長。自分を犠牲にするなんて」

明久「雄二いいいいいい！！！！！！！！」

明久の叫ぶ声が廊下に響いた。

少し時間が戻り拓斗率いる遊撃部隊。

沖田「隊長俺達はこのままでいいんですかね」

と、隊員の1人が質問してくる。

ちなみに俺達がいる場所は戦場である

3階の1つ上にある4回の広場で待機していた。

拓斗「ああ、今はまだ大丈夫だ。

康太の情報だと前線部隊が頑張ったおかげで

相手の戦力も激減してるし、

今も明久たち中堅部隊が頑張ってくれているからな。

もう少ししたら明久たちを助けに出て一気に勝負を仕掛ける

ぞ」

沖田「了解です隊長！」

そこへ

D「あそこにFクラスのヤツラがいるぞ」

そこへ別の階段からあがってきたDクラスの別働隊と出会った。

拓斗「あっちも別働隊を用意していたか。

よし、皆、迎撃準備！

ただし後のことも含めて出過ぎるなよ。

皆は武器で自分のことを守ってくれ」

近藤「了解！」

土方「でも、それじゃあDクラスのヤツラが倒せないぞ」

拓斗「大丈夫。まあ見てろって」

D「Fクラスのヤツラを補習し送りにするんだ！！」

相手は次々と召喚獣を召喚していく。

こちらも迎撃のため召喚していく

拓斗「えつと今のフィールドは化学か、

じゃあ『試獣^{サモン}召喚』！！」

俺は皆より少し後ろで召喚獣を召喚する。

近藤「風間の召喚獣ってガンダムのケルビムだな」

俺の召喚獣はまんまケルビムの装備をした召喚獣だった。

拓斗「ああ、アニメ見てカッコイイなと思ってたら、こうなってた。

さて、じゃあいきますかね。風間拓斗、目標を狙い打つぜ！」

俺がそういうと、スナイパーライフルを構え、

次々に敵を撃っていく。

そして次々と命中していき、戦死させていく。

D「な、なんだ・いきなり俺の召喚獣が戦死になったぞ」

D「おい、まさかあいつの召喚獣のせいか!？」

風間拓斗

化学 387点

D「ってなんだよあの点数!？」

D「俺達がかなう訳ないだろ!？」

拓斗「今のうちだ!3人がかりで敵を討ち取っていくんだ!
大丈夫。俺がここから皆を守ってやるから」

近藤「スゲエよ風間——いや、兄貴!」

沖田「皆、兄貴の指示通りに動くんだ!」

土方「兄貴が俺達を守ってくれる!
皆恐れるな!!!」

拓斗「兄貴って……まあいいか」

Dクラス戦　く阿修羅降臨！？く

数十分後、

拓斗「よし、1人残らず倒したな」

俺たちはDクラスの別働隊を殲滅する。

近藤「流石です兄貴」

拓斗「じゃあ、もう少しここで待機だ」

土方「了解です」

そこへ

『ピンポンパンポーン♪』

《連絡致します》

沖田「校内放送？」

拓斗「ん？何かどつかで聞いた事のある声だな」

近藤「なあ、こいつ須川じゃねーか？」

土方「ああ、須川だな」

これは雄二の策だろうな。

《船越先生、船越先生。至急体育館裏までお越し下さい》

沖田「どうやら何かの作戦みたいだな」

拓斗「多分、先生を別の場所に向かわせて

時間を稼ぐのが狙いだろうな」

近藤「ああ、そういうことか」

拓斗「よし。じゃ、これが好機だな。

俺達、遊撃隊はこれより明久率いる中堅部隊を――」

《吉井明久君が体育館裏で待っています。

なんでも生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

拓斗「……………」

……………。

拓斗「ほっほっ」

近藤「あ……………兄貴？」

沖田（お……………おい…兄貴の背中から何か見えないか？）

土方（えっと……………真っ黒な殺意に満ちたオーラが見えるんだけど…）

近藤（俺には怒り狂った阿修羅像が見えるぞ…）

斉藤（な……………なあ……………これって……………ちよっとヤバくないか？）

（（ちよっとどころじゃなくてかなりヤバイだろ…）（（

拓斗「斉藤」

斉藤「は、はいっ！！」

拓斗「船越先生について、説明をしてくれないか？」

斉藤「り、了解！船越先生は数学の担任をしておられる
45歳独身の女性教諭でありますっ！」

拓斗「そうだな。でもその船越先生って、

確か何か良からぬ噂が流れてなかったか？沖田」

沖田「は、はいっ！船越先生は仕事にのめり込み過ぎて

婚期を逃してしまい、遂には男子生徒達に単位を盾に
交際を迫る様になったと聞いておりますっ！」

拓斗「そうだったな。確かにその船越先生なら、

あんな放送流せば確実に体育館裏へ直行するだろうし、
明久が来るまで何時間でもその場を離れないだろうけど、
言い換えればそれは明久の貞操の危機って事だよな。ところ
でさ近藤」

近藤「なっ、何でございましょうか兄貴っ！！」

拓斗「俺が自己紹介の時に言った言葉、もう一度言ってくれないか
な？」

近藤「え……………えーと……………、と、

特技が銃を扱う事で、趣味がゲームや漫画でお菓子が大好き

…」

拓斗「その後」

近藤「……………吉井にちよつかい出す奴は…………許さない…と…
…」

拓斗「そうだ。それが俺の理念で信念だ。
たとえ相手が教師だろうが誰だろうが変わる事の無い
絶対的な物だ。それを踏まえて土方」

土方「何なりとっ!!」

拓斗「怖がらなくていいよ。君の意見が聞きたい、今の放送はつまり、

『船越先生を誘き出す為に雄二と須川が明久を生贄に捧げた』
と捉えてもいいんだろうか？」

土方「まっ、間違いないと思われますっ！」

拓斗「そうか……………。間違いないか……………」

近藤「…………あ、兄貴…。もしかしたら…あくまで『もしかしたら』
ですが！」

吉井がクラスの為に自らの身を犠牲にしたという可能性も…
…」

明久「雄二iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

明久の叫び声が俺達に聞こえた。

拓斗「……可能性も？」

近藤「……………あるわけないですよ。はい」

拓斗「……なあ」

斉藤「なんでしょうか兄貴」

拓斗「俺今から大事な用事ができたんだが
少しお前らに部隊を任せていいか？」

F遊撃隊皆「「「「お任せしてください！！！！」」」」

拓斗「では任せる」

俺は部隊を近藤や横溝たちに任せある場所へ向かった。

斉藤「なあ…近藤。兄貴もしかして…」

近藤「……………とりあえず、俺達と言える事は一つだけだ……………」

沖田「そ……………そうだな……………」

「「「「さよなら、坂本・須川……………」」」」

Dクラス戦 雄二「イイイイイイ……！！！！」

俺は部隊を近藤たちに任せ放送室に来ていた。

須川「まっ、待ってくれ！俺はただ坂本の指示に従っただけなんだ！

頼む、許してくれ！」

拓斗「へえ、雄二の指示か……」

須川「そ、そうなんだよ！俺は嫌だって言っただぞ！？

けど坂本の奴『やらねーと生爪剥がす』って

脅すから身を守る為に仕方無く！」

拓斗「その割には妙にノリノリで口走ってた様に聞こえたけどなあ」

須川「き、気のせいだ気のせい！」

拓斗「でもそれは放送したら俺に殺られるって可能性を考えなかったんだな」

須川「そ、それは……」

拓斗「……まあ今正直に話したら許さなくもないかもしれないな」

須川「はい！坂本の指示がおもしろくて放送しました！」

拓斗「……成る程。良く分かったよ」

須川「そっ、そうかつ！それじゃ、俺の事見逃して——」

拓斗「先に向こうで待ってな！大丈夫だ。

「すぐ雄二もそっちに送るから。寂しくなんかないから」

須川「え？さっき許してくれるって」

拓斗「かもしれないって言ったただけだ」

須川「や……やめ」

拓斗「さようなら。禁忌を犯した大馬鹿野郎」

須川「ギヤアアアアアアアア——！！！！！」

雄二 sides

ドバンツ！！

雄二「よお、明久」

ウチのクラス、いやこの学園のバカ代表である明久が
血の涙を流しながら教室に飛び込んできた。

そろそろ来る頃だと思つたぜ。

明久「雄二」。何か？その清々しい程に晴れやかな笑顔は」

雄二「そうか？自分じゃ良く分からんなあ」

明久「……………校内放送…」

雄二「ああ。バッチリ聞こえたぞ」

明久「やっぱりかあ！貴様僕の不幸を喜んでいやがるな！？」

何だその語尾のゝはっ！？許さん！」

何当たり前の事言ってやがる。

お前の不幸は俺にとつては最高の幸せだ。

俺は1日に1回はお前が不幸になる瞬間を見なければ寝つきが悪くなるんだよ。

明久「——っと、今は貴様に構ってる暇は無い。

須川君が何処にいるか知らない？」

雄二「須川か？もうすぐ戻って来るんじゃないか？」

明久「そうか…。もうすぐ戻って来るか…」

やはり須川を探してたか。

明久の手を見ると、右手にはカッター、

左手には砂をパンパンに詰めた靴下が握られていた。
こいつ殺る気満々だな。

明久「やれる…、僕なら殺れる…！」

雄二「殺るなつての」

明久「ああ、須川君……。早く…、早く君に逢いたいよ……」

……………そろそろネタバラシしてやるか。

雄二「ちなみにだな、明久」

明久「何だい雄二？今は雄二の話聞いてる暇は無いんだけど。
僕にとって今の最優先事項は——」

雄二「あの放送を指示したのは俺だ！」

明久「貴様をブチ殺す事だあああああ——！！！」

予想通り、明久がいきり立って襲い掛かって来た。

フフン、バカめ！

雄二「あ、船越先生」

シュバツ！
↑明久が素早く方向転換した音

バタンツ！
↑明久が掃除用具入れに飛び込んだ音

こいつは本当に期待を裏切らないリアクションをしてくれるな。
だからこそこいつをからかうのは止められないんだよな。

雄二「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

一夏「そうだな。チラホラと下校しているしな。
生徒の姿も見え始めたし、頃合いだろう」

第「一気に勝負を決めるチャンスだな」

康太「……………（コクコク）」

雄二「よし！Dクラス代表の首級^{くび}を獲りにいくぞ！」

F『『『『おうっ！』『』『』』

掃除用具入れの中に居る明久をほったらかして、
いよいよ決着をつける為に出陣する。
明久そこでずっと怯えているが良い。
いもしない船越女史の影に怯えながらな。
いや〜これで今日はグッスリ眠れそうだな

秀吉「しかし雄二よ。明久を嵌めるのは良いが、
大事な事を忘れておりやせぬか？」

雄二「んあ？何が？」

秀吉「何がって…………」

ガラッ

↑俺が教室の扉を開けた音

拓斗「雄二イイイイイイ——！！！！」

ドゴオオツ！！！！ ↑ 拓斗に腹を蹴り飛ばされた音

雄二「ぐぶをおっ！！！！？」

秀吉「タクトの存在をじゃよ——っってもう遅いみたいじゃな」

卓袱台の列を巻き込んで窓際までぶっ飛ばされながら、
俺が思った事はただ一つ……。

秀吉…、もっと早く言って欲しかった……。

ってか明久を嵌めることしか考えてなかったからタクトの存在を忘れてたぜ。

Dクラス戦　く雄二への制裁？く

拓斗「さあゝて。さっきの放送、

どーゆーつもりか説明してもらおうか」

俺は雄二に馬乗りした状態でエアガンを

雄二の口の中に押し込んだ状態で坂本君に問い詰める。

雄二「ま、まってふれ、ほへははひも――」

何言ってるのか分からないので

俺はエアガンを口からだし立ち上がった。

雄二「ま、待て！俺は何も知らねえ！

あれは須川の奴が勝手に――！」

拓斗「『全ては坂本の指示』。それが須川の遺言だ」

雄二（須川あつ！お前も既にこいつの手に掛かって！？）

秀吉（の、のう……。タクトの顔や制服に赤い汚れが

見えるんじゃないか……）

一夏（……き……きつとたまたま通りかかった

塗装屋の赤いペンキを頭から被っただけだ……）

篤（お、恐ろしいな……）

F（（（しゅ……修羅だ……）（）（））

周りの秀吉達がなんかブツブツ言ってるけど今はどーでもいい。
今、俺にとって一番大事なのは、こいつの処刑なんだからな。

拓斗「俺言ったはずだよな？ 明久に手を出す奴は許さないって。まさか忘れてた訳じゃ無いよなあ？」

雄二「あ…………アハハハ…………その…………まさか」

拓斗「よし。3秒やるから遺言残せ」

雄二「ちよつ、待ってくれ！ 悪気は無かったんだ！

ただ咄嗟に浮かんだ人間がたまたま明久だっただけで——！」

拓斗「悪気が無かったらあんな放送自体流すかあ——！」

秀吉「ま、まあまあ落ち着くのじゃタクト。

雄二も反省しておる様じゃし、もうその辺で——」

見かねた秀吉が仲裁に入る。

が、何で『自分は無関係』みたいな感じにいるのかな君たちは？

拓斗「なあ秀吉に一夏。お前らは教室にいたんだよな？

じゃあなんで雄二の行動を黙って見てたんだ？

返答次第じゃ——（ギロツ！）」

秀吉「ま、待つんじゃない！ ワシはちゃんと止めたんじゃないぞ！？

じゃが雄二の奴が強引に押し切ってじゃな————！」

拓斗「……………康太は？」

康太「……………っ——！（ビクッ！）……………お…………俺は…………
諜報から帰ってきたばかりで！（ブンブン）」

拓斗「……一夏は？」

一夏「お、俺も秀吉と箒と一緒に止めたんだ！」

箒「あ、ああ。ほ、本当だ」

拓斗「その取り巻き共は？」

F『『『『ほつ、補充テストに夢中で気付きませんでしたあっ！！！！』』』』

雄二「ウソつけテメエら！」

俺が発案した時物凄げーノリノリだった上に、
放送が流れた時なんか大爆笑の嵐だったじゃねーか！！」

F『『『『坂本おおお！！！！貴様何て余計な事を——！！！！！！』』』』

拓斗「五月蠅い！」

F『『『『すいませんでした』』』』

全員一斉に土下座。

そんな皆に一瞥もくれずに、俺はゆっくりと坂本君に歩み寄る。

拓斗「雄二。須川が向こうで待ってるよ。

寂しがらせてはいけなから早く逝ってあげないとな。
お前といた時間…楽しかったぜ」

雄二「ま、待て。一旦落ち着けタクト。

俺はただクラスの勝利の為に必死になってただけでな…」

拓斗「大丈夫、俺は落ち着いてる。

今ならアニメに出てくるザコキャラみたいに

お前を一瞬で散らすことができそうな気がする」

雄二「駄目だあああ！こいつ問答無用で殺る気満々だあああ！」

当たり前の事ぬかすな。

今日という今日はもう我慢ならない。

ガラッ！

F「伝令っ！Dクラスの本隊が遂に動き出したぞ！」

F『『『『えっ！？』『』『』

突然教室に入って来た伝令係によりもたらされる
Dクラス本隊の報らせが届いた。

くっ、何てタイミングの悪い！

これから雄二の息の根を止めようって時に！

雄二「そっ、そうか！Dクラスが動いたか！

よし、俺達も出陣するぞー！」

拓斗「あっ！コラ待て雄二っ！！」

報告を聞いた途端にダッシュで教室から出て行く雄二。

おのれ、このまま逃がすと思っているのか!?

秀吉「タクトよ、雄二の始末は後にせい!

まずはDクラスを叩く方が先決じゃ!」

拓斗「チッ!」

まあ良い。雄二には後でゆっくり地獄を見せるとして、先にDクラスとの決着をつけてやる!

拓斗「で、明久は今どこにいるんだ?

おそらく放送を聴いて1度ここに来ただろ?」

秀吉「その掃除用具入れに隠れておる」

ふと秀吉が指差した方を見ると、

掃除用具入れから僅かにガタガタ音がしてるのが聞こえてきた。
可哀想に……。あんなに怯えて…。

俺は用具入れのドアをゆっくり開けて、
出来る限り安心させる様に明久に呼び掛ける。

拓斗「明久大丈夫だ。船越先生はいない」

明久「…拓斗?本当にそこに船越先生いない?」

拓斗「ああ、いない。俺が明久に嘘つくと思うか?」

明久「うん」

ようやく安心してくれたのか、

明久がゆっくり掃除用具入れから出てくる。

しかも、チワワみたいにプルプル震えながら。

拓斗「明久行こう。Dクラスの本隊が動いたらしいから、

ここらで勝負を決めないとな」

明久「う、うん。ねえ、ホントに大丈夫だよな？

船越先生出てこないよね？」

拓斗「大丈夫だ！それに、もし出くわしたとしても

俺が船越先生をぶっ飛ばしてやるからな。

じゃあ行こうぜ」

明久「うん！」

俺の言葉を聴いて明久の調子が戻った。

……………本当に覚えているよ雄二。

Dクラス戦　　暴走寸前の明久

雄二「下校している連中に上手く溶け込め！

取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

平賀「皆、落ち着いて取り囲まれない様に周囲を見て動くんだ！

半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに、

残り半分は防衛しつつ囲まれている者を助けるんだ！」

雄二とDクラス代表平賀の指示が戦場に響き渡る。

渡り廊下は既に総力戦となっていた。

ウチのクラスの皆がDクラスの連中を取り囲んでる姿がそこら中に
見て取れる。

地力で劣るFクラスにとっては、多少姑息だろうと形振り構っては
られない。

下校中のドサクサに紛れて敵に近付き、取り囲んで打ち取るという
戦法で挑んでいた。

対してDクラスは、先ず囲まれない事を第一とし、

個々の実力がFクラスに勝るからこそ各個撃破の戦法を仕掛ける。
互いに一步も譲る事無く、戦場の緊迫感がどんどん増してゆく。

そんな中で、俺と明久はというと……。

明久「見つけたぞ、雄二いつ!!!」

拓斗「明久、気持ちは分かるが今は落ち着け!!!」

雄二への殺意をあらわにした明久が、

雄二へ襲い掛かるうとするのを俺が羽交い絞めして止めていた。

明久「離してくれ拓斗!あいつはっ!あのクソ野郎だけは——!!!」

拓斗「俺も出来るならそうしたいがな、

俺達の今の目的はDクラスを倒す事だ!」

明久「今は雄二を殺す事のほうが重要なんだ!!!」

拓斗「だから落ち着けて!」

うおっ!?凄いい力だ!明久の怒りは半端じゃないな!

でも放つといたら本隊ごと薙ぎ倒される可能性が!

そーなったら試召戦争は俺達の負けだ!

この場はなんとか明久を落ち着かせないと

D「ここにもFクラスの奴が居たぞ!」

D「バカめ、こんな孤立した所にノコノコと!」

D「まとめてフクロにしてやれえ!」

そんな事やってる間にDクラスの連中が3人、
召喚獣を引き連れてこっちに向かって来た。

チツ、こんな時に！

明久「……………五月蠅いな、人がイラついてる時に」

拓斗「え？」

明久がボソツと毒吐いたと思ったら、ゆっくりと3人の正面に立つ。
明久の背中からから黒いオーラが見える。

D「……じゃあな、雑魚共が！」「」

明久「——試^{サモン}獣召喚」

ズバアッ！

D「……なあっ！！？」「」

一閃！！

魔法陣から改造学ランにガンダムエクシアのGNソードを装備した
明久の召喚獣が現れた瞬間、
襲い掛かってきた3体の召喚獣は一瞬で真つ二つとなって消滅した。

すっ、凄げえ！

あの一瞬ですれ違いざまに3体同時に斬り捨てたぞ！
流石明久だな。召喚獣の操作技術レベルが桁違いだ！

D「なっ、なにが起きたんだ？一瞬で！？」

D「どういう事！？今何が起きたの！？全然見えなかったんだけど！？」

その一部始終を見ていたDクラスの連中に動揺が走る。

そりゃそうだろうよ。こんな真似が出来るのは教師位だ。いや、教師でも難しいかもしれないな。

しかもそれを自分達より点数の劣るFクラスの人間がやってのけたんだから信じられないのも無理もない。やはり、明久は伊達じゃないって事が。さすがだぜ。

D「てゆーか、あいつ吉井だろ！？学園一の“バカ”だって有名な！」

D「気を付けろ！どうやら奴は見た目は“バカ”そうだけどただの“バカ”じゃなさそうだ！

“バカ”だからといって“バカ”にして掛かるところがちが“バカ”を見るぞ！」

D「分かった！こんなあからさまに“バカ”そんな奴に負けたら一生モンの恥だ！本気で仕留めにかかるぞ！」

……………おい。

今、何回明久の事を『バカ』って言ったんだ？

明久「仕方ない、雄二の事は後回しだ。

一先ず試召戦争に集中しよう。

Dクラスの連中で鬱憤晴らしをさせてもらおうとするよ」

拓斗「ソウダナ。オレモ丁度アイツヲブッコロシタイト思ッテタ所ダヨ」

D「皆掛かれえ！相手はたったの2人だ！」

D「2人もろとも補習室という名の牢獄へブチ込んでやれえ！！」

D『『『『『『『『『『『』』』』』』』』

拓斗「明久、行くぞ！」

明久「うんっ！」

互いに目を合わせて頷き合い、俺と明久は敵陣に向かって走り出した。

Dクラス、ここで決着を着けてやる！

ってか何より、お前らは禁忌^{タブー}に触れすぎた。
生きて帰れると思うなよ！

Dクラス戦　く明久の実績く

く雄二　sideく

F「坂本！敵本隊が妙に慌ただし！何かあったのかも——！」

近藤「ああつ、見ろ！敵陣ド真ん中に兄貴がいるぞ！」

土方「何い！？本当だ！兄貴がいるぞ！」

雄二「誰だ『兄貴』って？もしかしてタクトの事か？」

お前達の間になががあつたんだ？」

一部の奴らがタクトを『兄貴』って呼んでるけど、
あいつ一体何をやったんだ？

つーが無茶苦茶だな。たった1人で敵陣に突っ込んで行くなんて。
いくらあいつでも死に行く様なモンだぞ。
しかもあいつの召喚獣は遠距離タイプだろ。
近づかれたらアウトじゃねーか。

近藤「あれ？良く見たら吉井もいるぞ」

雄二「何？明久もいるのか？」

秀吉「なんという無茶をしておるんじゃ、明久もタクトも」

康太「……………無謀過ぎる」

一夏「さすがにムチャすぎるだろ」

明久も一緒だったのか……なら余計な心配はしなくて大丈夫だな。

一夏「雄二、今すぐ援軍を出そう。2人を助けないと！」

第「ああ、一夏の言うとおりだ。

あのままじゃ2人が戦死してしまう」

雄二「いや、その必要は無い。

それよりも、今の騒ぎで取り囲んでる連中にも動揺が走ってる。

この隙を突いて一気に押し返すぞ」

秀吉「雄二！お主こんな時にまで明久を不幸にしたいのか！」

一夏「そうだぞ雄二！ここであの2人がやられたらヤバイだろ！」

……秀吉と一夏の奴、何か勘違いしてるみたいだな。

あ、そうか。『アレ』は学園内のほとんどの奴が知らなかった

———というか、信じられてなかったんだっけか。

雄二「お前ら、別に俺は明久を補習室に送りたいから言ってるんじゃない。

あいつなら余計な心配をする必要が無いから言ってるんだ。
それに俺達が行っても邪魔になるだけだ」

秀吉「？、どういう意味じゃ？」

雄二「まずはタクトだがあいつはな観察処分者なんだよ」

一夏「なんだって！？タクトも観察処分者だって？」

雄二「ああ、俺が本人から聞いた話だと、

振り分け試験の日に教師ボコってなったらしい」

篤「アイツは何をしてるんだ？」

雄二「大方、明久をバカにされたからだろうな。

で、話を戻すが。そのおかげで操作技術も向上してる。

それにあいつはAクラス次席クラスだからな。

そう簡単にはやられない」

一夏「そういえばそうだったな」

雄二「で、明久だが伊達に『観察処分者』なんて

呼ばれてる訳じゃないって事さ。

あいつには、ある『実績』があるんだよ」

秀・康・一・篤『『『『実績？』』』』

雄二「お前達、1年の頃の召喚獣操作の実技授業で

『勝ち抜き組手』ってのがあった事を憶えてるか？」

一夏「ああ、アレか」

篤「確か1人でやるのとタッグでやるのがあったな」

一夏「あれはかなりハードだったよな」

康太「……あれはキツかった」

勝ち抜き組手――。

予め設定された点数同士で組手を行い、

何人連続で勝ち続けられるかを競うという単純な物。

それでシングル戦とタッグ戦が行われたのだ。

雄二「その組手で、お前達は何人連続で勝つ事が出来た？」

秀吉「ワシは1人じゃとせいぜい1・2人位じゃった。

タッグでも同じぐらいじゃのう」

康太「……………1人でなら4人。ペアなら6ペア」

一夏「俺は10人だな。ペアは筈とだったから24ペアぐらいだな」

筈「私も一夏と同じくらいだ」

近藤「なあなあ、お前何人倒せた？」

斉藤「ゼロだよ！いきなりAクラス級の奴に当たっちまったんだよ！

笑いたきゃ笑え！」

近藤「俺もだ」

雄二「まあ、そんな物だろう。これがAクラスの奴らなら、

大体10〜15人位、トップレベルなら25人は越えるだろ

うな」

秀吉「で、その組手と明久にどんな関係があるんじゃない？」

雄二「まあ待て。俺は5人程度だった。

で、確かタクトは1人で50人近く倒したはずだ」

一夏「50人だって！？俺の5倍あるじゃないか？」

秀吉「確か八雲の召喚獣は遠距離タイプじゃったのう。

それで50人じゃと！？」

第「凄すぎるなタクトは」

沖田「さすが兄貴だ！」

雄二「で、明久はな……、学園全体で唯1人『200人斬り』を達成してるんだ」

皆『『『ひや、200人斬り！！！？』』』』

皆驚いてるな。無理もない。

言ってる俺だって未だに信じられないんだからな。

だが俺の目の前で起きたんだから事実だ。

しかもアレは途中で教師が中止したから200人で止まったがあのままだと多分もつとってたぞ

一夏「嘘だろ！？噂には聞いてたけど、

200人斬りなんて作り話だと思ってたぞ俺は！？」

斉藤「俺はてつきりAクラスの奴が達成したものとはかりに——！」

第「な、何故明久がそこまでの偉業を！？」

近藤「兄貴の4倍!？」

横溝「兄貴すら超えるだ?!? 吉井はそんなに凄いのか!？」

雄二「明久から聞いたんだがな、

観察処分者になった生徒は召喚獣の操作が格段としやすくなるらしい。

どーゆー原理かは知らんが」

秀吉「何と」

第「では、明久はその力を使って200人斬りを？」

雄二「まあ、それだけじゃ無いだろうが…」

あれだけ普段から雑用で召喚獣を操作してりゃ、
何かしらのコツを掴んでもおかしくないだろうしな。

雄二「それにあの2人がペアを組んでも余裕で100ペア斬りを達成したぞ」

秀吉「そ、それは凄いのう」

雄二「という訳で、あの2人は全く心配要らん。

たとえ10人位に囲まれたとしても、

余程点数に差が無い限り負ける事など無いだろう。

それに逆に俺達が言っても邪魔にしかならん。

俺達は先ず落ち着いて周りの奴らを片付ける事に
集中してても良い。

もし負けたとしても、まだ手はあるからな」

一夏「……（ニヤニヤ）」

雄二「？、何だよ一夏。そのニヤけた顔は？」

一夏「いや。ただ雄二が明久に対して外道な事をやっとする割には、結構明久の事を信頼しとるんだなあと思ったただけだ」

秀吉「そうじゃな」

雄二「……うるせえよ。ホラ、さっさと周りの連中を片付けるぞ」

一夏「了解」

秀吉「うむ、了解じゃ」

康太「……（コクッ）」

第「あの2人には遅れはとらん」

秀吉「……けど結局タクトに殺される羽目になるんじゃないかな……」

康太「……哀れ」

第「自業自得だろ」

「夏「雄」サヨナラ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5267y/>

バカとISとガンナーと召喚獣

2011年12月31日20時54分発行